

(平成30年4月19日)

第28回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： H30. 4. 17 (火) 18:30～21:00

場所： 東京・文京シビックセンター 4F B会議室

出席者： 17名

< 配布資料 >

- 資料—1 ● ヴィンセント・ジェッソン・ア普林 Vincent Jesson Applin(1834-1914) 東郷えりか氏作成
- 資料—2 ● 門倉傳次郎 「上田市史」下巻 上田市(藤沢直枝)編、信濃毎日新聞社、1940年
- 資料—3 ● 中居屋重兵衛 東郷えりか氏作成
- 資料—4 ● 赤松小三郎講演会チラシ(8月5日、尾崎行也氏講演会)

< 内容 >

幕末に西洋馬術及び馬療法を英国騎兵士官ア普林に学んだ上田藩士門倉傳次郎の玄孫に当たる翻訳家の東郷えりか氏にア普林、門倉伝次郎、中居屋重兵衛について調査研究結果をご報告頂く。

1. 門倉伝次郎(文政3年～明治21年、1820年～1888年)
 - ・佐久間象山の弟子。象山幽閉後、蘭医伊東玄朴の門に入る。後、蘭学者栗田敬策のもとで蘭書「ネットント」を翻訳し、「西洋馬術規範」を出版する。
 - ・傳次郎が習った馬療法とは蹄鉄と去勢のことかと思われる。
 - ・ア普林に調教してもらった青毛馬に松平忠礼が騎乗している写真がある。(松平氏資料集、上田市立博物館)手綱を取っているのが傳次郎と思われる。(資料—2ご参照)
2. ア普林(1834年～1914年、天保5年～大正3年)
 - ・イギリス公使館付き騎馬護衛隊隊長として1861年11月～1867年夏まで日本に滞在。本来の所属は Military Train という兵站部門(後方支援、Logistics)の将校である。
 - ・日本では狩猟が好きなのでよく狩猟に出かけたようだ。
 - ・ア普林の住まいは横浜の外人居留地の81番にあったようだ。イギリス公使館は20番。(資料—1ご参照)
3. 中居屋重兵衛(文政3年～文久元年、1820-1861)

- ・吾妻郡中居村（現群馬県の嬭恋村）出身の豪商。
生家は中居村の名主で、火薬を製造しており、佐久間象山からも教えを受けた。父は稲葉長門守の木挽町の中屋敷に寄寓。
- ・上田市生田飯沼地区出身の松田玄仲（中居屋重右衛門）という大番頭がいた。上田町の城下町商人、伊藤林之助は藩の指示で横浜の中居屋に滞在しており、日記を残している。別の上田商人による「滝沢家文書」もあり。
- ・安政 5 年には幕府から横浜移転を打診されていた節がある。6 年 4 月に形式上、出店貿易願書がでている。間口 30 間の横浜の店は、10 人ほどが出資したものだった。「奥羽・上・信・甲州辺之荷主」が多数泊まり込み、大量の生糸を扱っていた。
- ・中居屋重兵衛と桜田門外の変
桜田門外の変（1860 年 3 月 24 日）の翌日、F・ホールは日記にこう書いた。
「ピストルから二発、ノリモン [乗物] に向けて銃弾が発せられたが、激しい抗争ののち、襲撃者は抑え込まれた。ハリス宛のヒュースケンの手紙では、摂政 [大老] 側は 10 人が殺され、襲撃者の 2 人が捕らえられたが、即座にハラキリをした。……襲撃者は水戸の従者と判明している」
事件に使われた拳銃は、中居屋重兵衛がウォルシュ商会のジョージ・ホールから購入して、鉄砲方与力の藤田長鎮を経て、水戸烈士に渡した 20 挺の 5 連発拳銃だった。
佐佐木杜太郎、『開国の先覚者中居屋重兵衛』新人物往来社
(資料— 3 参照)

4. 考察（東郷えりか氏）

- ・開国か攘夷か、佐幕派か倒幕派か、といった対立軸で幕末史を考えつづける限り、明治維新の本質を見失うのではないか。
- ・日本人はつい 150 年前まで、ほぼすべてを人力に頼り、水力や畜力ですら、ほとんど使わずに暮らし、人糞を肥料に最低限の食料生産をするという、世界でもかなり特殊な暮らしを営んできた。
- ・そんな日本に勢力拡大をつづける欧米諸国の波が押し寄せ、国民国家となって条約を結び、自由貿易を推進するならば、領土は侵略しないという条件を突きつけた。
- ・10 年にも満たない期間に権力構造も人びとの暮らしも根底から覆され、内戦に突入した。佐幕派の一部が内戦を避けて、天皇と新政府に恭順し、江戸城を明け渡したのは、国内の分裂が列強の侵略を招くのを知っていたからであり、

統一された国民国家のふりをせざるをえなかったからだ。

- ・勝者はかならずしも薩長であったわけでもない。むしろ、いち早く資本家となった人たちであり、新たに生まれた国家の権力者となった人たちだろう。
- ・明治以降に生まれた世代にとっては、国民国家が規範となり、その観点から物事を見がちだ。明治以降の日本が何を得て、何を失ったかを理解することで、この先、進むべき道も見えてくるのではないか。

以上

小山平六（62期）

● ヴィンセント・ジェッソン・アプリン Vincent Jesson Applin (1834-1914)

1861年11月1日に来日し、1867年夏ごろまでイギリス公使館付き騎馬護衛隊の隊長として活躍した。騎馬護衛ではあるが、騎兵将校ではなく、本来はミリタリー・トレイン (Military Train) という兵站部門に所属していた。このロジスティック部隊はクリミア戦争で初めて Land Transport Corps として創設され、戦争後にミリタリー・トレインと改名された。英国陸軍軍需品補給部隊の前身である。アプリンは、クリミア戦争時の功績によって中尉に昇格したと、ポルスブルック蘭領事が書いている。アプリンは1859年末ごろアロー戦争のために中国へ派兵された。ミリタリー・トレインの第一大隊の一部は、軍需物資輸送用の馬を購入するために1860年前半に来日しているため、短期間、横浜、長崎、箱館のいずれかにいた可能性もある。同年秋には、連合軍は北京を占領して北京条約を締結しているが、アプリンは1861年2月にはまだ天津にいたことが確認されている。

この年の7月に第一次東禅寺事件 (イギリス公使館襲撃) が発生したのを機に「12名の騎兵からなる騎馬護衛隊」が必要とオールコックが考え、「有能な将校に指揮された立派な馬に乗った護衛隊」が要請され、アプリン指揮下の12名の騎馬部隊、Applin's Horse が、アラブ馬等とともに日本に送られることになった。

1861年1月のヒュースケン暗殺事件直後、イギリス公使館はいったん横浜に移転したが、3月には再び江戸に戻っており、第一次東禅寺事件後も江戸に残ったようなので、アプリンは当初、品川の東禅寺にいたと思われる。1862年3月には公使のオールコックが賜暇で帰国し、代わりに短期間ウィンチェスターが代理となり、5月にはジョン・ニールが代理公使として赴任した。ウィリアム・ウィリス医師も同じころ来日したので、彼らはみな6月26日の第二次東禅寺事件に遭遇している。公使館はその後、再び横浜に移転し、居留地20番 (現在、横浜人形の家がある場所) に仮住まいすることになった。文久2 (1862) 年の「外国人士官商人館番附并名前」に「八十一番 同館士官英 アブヒレン、モンゴメリン」とあるので、これが彼だとすれば、現在、横浜大世界がある付近に、一時期住んでいたかもしれない。

1862年9月の生麦事件では、アプリンは事件発生時に不在で、ヴァイス英領事が無断で連れだした騎馬護衛隊をあとから追いかけるはめになった。10月には居留地裏の空き地だった現在の中華街の場所で開かれた横浜競馬で、ヴァイス領事、ポルスブルック蘭領事、S・J・ガワーとエイベル・ガワーの兄弟とともに、世話役として名を連ねた。12月には、ニール代理公使の一行とともに江戸を騎馬で訪問している。

1863年6月には生麦事件の賠償金が支払われ、運上所に運ばれていた44万ドルという大金を大八車でイギリス船に積み込む作業の警備に当たったほか、7月には偵察行動にでている。政情不安のこの時期、居留民は浪士の襲撃などに備えて広範囲の実測図を作成し、作戦を練っていた。10月に井土ヶ谷事件が発生した際も、アプリンは現場に駆けつけている。被害者であるアフリカ猟兵第三大隊のカミュは、こうした偵察行動にでていたのかもしれない。この年の暮れにアプリンは再び功勞により大尉に昇進した。

1864年3月に、オールコックが再赴任した際にはアプリンの騎馬護衛隊が出迎え

た。前年8月の薩英戦争と、この年9月の下関戦争にアプリンが赴いた記録はないので、この間はずっと横浜にいたと思われる。10月に日英合同観兵式が居留地裏の空き地で行なわれたのを機に、神奈川奉行支配の定番および下番からなる警衛隊である幕府兵（窪田泉太郎が頭取取締役）のイギリス駐屯軍による洋式訓練が始まった。11月に起きた鎌倉事件の犯人が年末に逮捕・処刑されたことで、幕府への信頼が回復していた。オールコックから幕府への12月12日付の書簡には、この教連の担当者として第20連隊第2大隊のブラウン大佐が指名されていたほか、騎馬の訓練についてはアプリン大尉の名前が挙げられている。ただし、アプリンが健康を害して2カ月ほど日本を離れているので、騎兵の教練はそれまで行なえないとも書かれていた。

赤松小三郎が横浜にア普林を訪ねたとされるのは、1864年12月から翌年4月までの期間である。『上田市史』の赤松小三郎の項には、「慶應元〔1865〕年再び下曾根金三郎〔信敦〕の塾に入り、専ら英学を学びしが、此時英国兵法の大に則るべき者あるを知り、藩の許諾を得、門倉傳次郎、山田純一郎と共に、英国騎兵士官オヒシールアプリンに就きて、騎兵術を伝習し、同時に英文学を学べり」とある。

オールコックは1865年初めに離任し、7月には上海領事だったハリー・パークスが公使として横浜に着任した。アプリンはこのころたびたびワグマンの『ジャパン・パンチ』に狩猟姿で描かれている。駐屯軍も増えて、治安も回復し、多少の余裕ができたのかもしれない。1866年1月には、幕府の苦しい事情を説明しに横浜のイギリス公使館を訪ねた老中の松平伯耆守を、J・マクドナルドの四輪馬車で川崎まで送り届けた際に、アプリンの部隊が護衛に付いた。この年7月から1カ月半にわたってパークスが長崎、鹿児島、下関、宇和島を訪問し、アプリンとウィリスもそれに随行している。アプリンは後日、薩摩侯に贈る西洋鞍を選ぶ役割を担った記録があるので、馬術を披露したのかもしれない。

1867年5月にはパークスの一行とともに、大坂城で徳川慶喜に謁見している。このときは確かに馬術を披露しており、E・サトウとミットフォードなどがそれについて言及している。この時期には、高輪接遇所と、1866年11月の横浜の大火のあとブリジェンス設計で山手に建設された公使館（山手120番）を往復していただろう。正確にいつ離日したかは不明だが、7月には愛馬フレddieまたはフレdderieを売却しているので、そのころであったと考えられる。

1868年前半にはデヴォン州エクセターでアグネス・スタンリー・フェレイラと結婚し、翌年には長男レジナルドが誕生し、つづいて長女メロニーと次男アーサーが生まれた。レジナルドは第14軽騎兵連隊の中佐にまで昇進したほか機関銃隊でも活躍し、『Across the Seven Seas』という自伝を書いた。アプリンは帰国後もパークスと家族ぐるみの付き合いをしており、彼の次男で日本生まれのダグラス（ウィリスが取りあげた）とレジナルドは同級生で、のちにシンガポールで再会している。次男アーサーは著名な戯曲家・小説家で、その作品の一つは『ロンドン・バレー・ピカデリー』という邦題で1930年に春陽堂から出版された。アーサーの妻はエディス・オリーヴという舞台女優で、ワグマンの弟のセオドア・B・ワグマンが描いた肖像画が残っている。アプリン自身は、1877年の露土戦争にもう一度従軍しているが、1914年にロンドンで死去した。享年80歳。

門倉傳次郎

上田藩士。文政三年八月二十六日生る。容貌魁偉、膂力人に過ぐ。幼にして武術を嗜み、殊に馬術に妙を得たり。十三歳にして乗初の駟を勤め、十五歳にて江戸に出で、特に修業扶持二人口を給せらる。嘉永二年中小姓となり仙臺の土草刈又七郎の門に入る。門下生數百人、就中傳次郎は、福島藩岡松又蔵、長岡藩鈴木東馬、加州藩大曲豊蔵、宇都宮藩目賀田金八等と共に、群を抜くと稱せらる。後岩淵實光に就き、八條流早馬の法を學ぶ。傳次郎は既に伊賀貞丈の書により古術を究めしが、後に習得せる高麗流、八條流を併せ、諸般の武術、舊法を墨守すべからざるを覺り、佐久間象山に就きて、西洋馬術を學び、馬上砲打方、竝に西洋馬療等を修む。象山その馬術に精妙なるを見、自らは學によりて、洋式馬術を教へ、彼よりは技によりて騎術を習へる程なりき。象山の幽閉せらるゝや、傳次郎、蘭医伊東玄朴の門に入り、後蘭學者栗田敬策に囑して蘭書ネツテントを譯せしめ、西洋馬術規範と名づけて出版す。

安政四年給人席に進み、十人扶持を給せらる。藩主松平忠固江戸扇橋邸に馬場を設け、傳次郎をして西洋馬術の普及を計れり。萬延元年忠禮襲ぐや、献上馬御用を命ぜられ、三人口を増給せられ獨禮席に進む。此頃横濱に英國騎兵士官アプリンあり。上田藩幕府に請ひ、傳次郎をしてアプリンに就き、西洋馬術及び馬療法を修めしむ。後仙臺産の青毛馬を購ひ、飛雲と名づけ、アプリンに託し、一年彼國の乗馬法を以て訓育せしめ、以て藩に引取る。慶應年間征長の役あり。列藩駿足を率ゐたるもの少なからずといへども、其の扮装全く西洋式なりしは、上田藩の乗馬のみなりしといふ。明治元年西洋馬術に關して献言せることあり。同三年七月馬術局教頭 兼馬政局判司を命ぜられ、同五年九月陸軍々醫寮八等出仕、同七年一月陸軍馬醫副に任ぜられ、次いで横濱に在勤し、同八年六月從七位に叙せられ 同九年十二月一等級下賜。十年西南戦役起るや、熊本鎮臺に在勤を命ぜられ、同十二年一月軍馬買辨のため鹿児島に下る、同年七月年滿ちて罷役となり、爾來茨城懸矢田部町に悠々晩年を送る。明治二十一年一月に至り、慢性腎臓炎に罹り、十月十八日逝く。年七十一

● 中居屋重兵衛

『昇平日録』抜粋（安政6年1月から4月1日まで）

- 1月7日 会津家エ差出図面認メル。
- 1月11日 隠居紀州産物ノ掛ケ合ニ長島氏江参ル。
- 1月15日 鵜殿様御勝手方ヨリ御達シ保助参ル。雷管五千粒廿五日迄ニ納、合薬十貫目十七日迄ニ納。
- 1月21日 上田産物会所主人堀老君同道。交易ノ儀ニ付参ル。
- 1月24日 鵜殿様ヨリ急用申来ル、喜三郎参ル。
- 1月28日 村垣様 岩瀬様 稲葉様参ル。紀州様江産物願書差出ス。
- 2月3日 伊豆山代官長倉金平様ふじや同道ニ而参ル。
- 2月7日 上田候御勘定所江罷出ル。御奉行稲垣林右衛門様……。右御取持山海ノ珍味取揃御馳走、右席江御家老岡部志津馬様、御側御用人岡部四郎兵衛様、大井右源太様御出席。……帰ハ村垣様ヨリ世親父方へ立寄四ツ過帰宿
- 2月9日 上田候勘定奉行ヨリ書状至来。……井上様江願書差上ル。
- 2月11日 朝早村垣淡路守様罷出候処、御用筋ニ付神奈川御出張……。
- 2月17日 会津候交易掛リ中野氏参ル。御酒出ス。
- 2月21日 昼ヨリ築地親父方へ参リ、夫ヨリ岩瀬候方へ参殿、芝江立寄帰り。
- 2月23日 親父方、岩瀬候、書面出ス。
- 2月24日 御役替……外国奉行酒井隠岐守、軍艦奉行永井玄蕃頭……
- 2月29日 村垣淡路守様江参ル。親父方江参リ、岩瀬様江参リ……
- 3月5日 伊賀守様、御進達九日被下候引合。
- 3月8日 水野様御役所四ツ時罷出ル。
- 3月14日 外国奉行水野筑後守ヨリ五ツ半時御呼出し……。
- 3月17日 ……夫ヨリ伊賀守様、夫ヨリ村垣様ヨリ岩瀬様江参リ帰り。
- 3月18日 松平伊賀守様御勘定奉行松平様御出、御国産書御持参御酒出ス。

（佐佐木杜太郎著、『開国の先覚者 中居屋重兵衛』、新人物往来社の付録より）

- 6月19日 中居屋、横浜で創業（「開港の広場」113号）
- 8月 「横浜移住人中、中居屋重兵衛なるもの、本町四丁目現今本町三丁目南側の角に銅瓦を以て美麗なる家屋を建設せしに、華美なるを以て譴責せられ、之を改造せりと云ふ」（太田久好編『横浜沿革誌』1892年）
- 8月28日以降 神奈川奉行の赤松左衛門尉範忠が、「銅瓦で屋根を葺くなど分を越えた奢りである。五日間の閉店謹慎と、早々に銅瓦を土瓦に改めることを申し付け」た。（野史台隠士著『中居屋尊王驚異記』1929年）
- 9月28日 「既ニ四丁目ニ中居屋重兵衛と申方、表間口三十間も有之、チャン流し之屋根ニて一際目立候普請被致候得共、……先頃信州之荷主、異人江生糸三千両計売渡し候処、不残洋銀ニて相渡し、何方へ参り候ても引替無之」（三井『永書』、萩原進著『新版 炎の生糸商 中居屋重兵衛』、有隣新書）
- 文久元年 「当時、外商にして最も多額の買入を為す者を和蘭七番となす。重兵衛が

売込商館の中、重もなる者は即ち是れなり。蘭七の糸を買ふや悉く之を海岸の倉庫に積み入れ、以て便船の来るのを待つ例なりしが、重兵衛、開店の後、二年、一日、奉行所の官吏来りて外商倉庫の貨物を改め、蘭七の倉庫生糸の充溢せるを見て大に驚きて曰く。国産斯くの如く日に外国に至らば、期年ならずして国中の絹布の跡を絶たん。……一時の利を貪りて叨りに海外に輸出せば、後日必ず臍を嚙むの悔あらん。今より以後、売込に従事せる者、日に五百斤を超ゆるべからず。……数日の後、彼れは果して羈束の綱を破り、跳梁一番、限外無量の糸を外人に売れり。彼の不遜、素と幕吏の憎む所ろ、乃ち機乗ずべしとなして捕吏数名の桎梏を受け……。店開けてより閉づるまで、其の間僅かに三年」(野沢枕城著、「原善三郎伝」『横浜貿易新報』1899年) 5月4日(1861/6/11) F・ホールとシモンズ医師が中居屋を往診。「現在のところ中居は運勢が下り坂になっており、ほとんど商売をしていない」

(Notehelfer, Japan Through American Eyes, Princeton University Press)

【関連年表】

安政5年

- 7月16日 (1858/8/24) 薩摩藩主島津斉彬死去
- 8月8日 (1858/9/14) 戊午の密勅
- 9月5日 (1858/10/11) 岩瀬忠震、外国奉行を解任。作事奉行へ。近藤茂左衛門捕縛。安政の大獄の始まり。
- 12月17日 (1859/1/20) 日下部伊三治、獄中で病死

安政6年

- 2月24日 (1859/3/28) 永井尚志、井上清直、外国奉行を解任。それぞれ軍艦奉行と小普請へ。代わりに酒井忠行と加藤正興が外国奉行に就任
- 6月2日 (1859/7/1) 横浜開港
- 6月23日 (1859/7/22) 堀田正睦、松平忠固老中を罷免
- 7月8日 (1859/8/8) 新見正興、外国奉行に就任
- 8月27日 (1859/9/23) 鵜飼吉左衛門・幸吉、茅根伊予之介斬首。水戸藩家老安島帯刀切腹。岩瀬忠震、永井尚志免職、蟄居
- 8月28日 (1859/9/24) 赤松範忠、外国奉行に就任
- 9月14日 (1859/10/9) 上田藩主松平忠固死去。梅田雲浜獄中で病死
- 10月7日 (1859/11/1) 橋本左内、頼三樹三郎斬首
- 10月27日 (1859/11/21) 吉田松陰斬首。
- 10月28日 (1859/11/22) 竹本正雅、外国奉行に就任
- 11月14日 (1859/12/7) G・ホールが居留地2番に商館を建設中(M. Brooke 日記)
- 12月11日 (1860/1/3) 横浜の火事

安政7/万延元年

- 1月18日 (1860/2/9) 万延元年遣米使節出発(新見正興、村垣範正、小栗忠順)
- 3月3日 (1860/3/24) 桜田門外の変
- 8月15日 (1860/9/29) 水戸藩徳川斉昭死去
- 9月27日 (1860/11/9) 万延元年遣米使節帰国
- 11月6日 (1860/12/17) 外国奉行堀利熙自殺